

令和3年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 三重県津市広明町13番地
管理機関名 三重県教育委員会
代表者名 教育長 木平 芳定

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年 4月20日(契約締結日)～ 令和3年 3月31日

2 指定校名・類型

学校名 三重県立飯南高等学校

学校長名 土方 清裕

類型 地域魅力化型

3 研究開発名

「チームいいなん」の挑戦 ～未来を切り拓く“地域に根ざした人材”育成～

4 研究開発概要

本事業では、地域が抱えている諸課題の解決や持続可能な社会の実現に向け、地域を学び場とした地域課題解決型のキャリア教育の実践を通じて、自ら考え挑戦したり、多様な価値観を持つ人々と対話・協働したりしながら、地域への愛着を持って、地域に貢献し、地域の未来を切り拓くことのできる、地域に根ざした人材を育成することを目的とし、必要な資質・能力を育むためのカリキュラム開発に取り組んでいく。

<地域に根ざした人材に必要な資質・能力>

- ①地域に飛び出し、地域住民や職業人等、様々な立場の人々、世代を越えた人々の思いや考えを聴き取り共感しながら、コミュニケーションできる力【対話力】
- ②地域の伝統文化や産業、魅力等について調べたり体験したりすることを通じて、課題や改善点を把握・整理する力【追究力】
- ③自らの技術を磨き、他者とかかわり合いながら、仮説を立て、地域課題の解決に向けた取組や活動を創造する力【創造力】
- ④地域課題を解決するための具体的な提案や活動等を効果的に発信する力【発信力】

<カリキュラム開発の方向性>

- ①総合学科の柱に位置付けている3科目、「産業社会と人間（1年次必修科目）」、「キャリアデザイン（2年次学校設定科目）」、「いいなんゼミ（3年次総合的な学習の時間）」を再構築し、3年間の学びの連動の強化を図る。
- ②4系列（郷土・環境、介護福祉、コンピュータ、総合進学）の特色を活かした地域貢献のための学習活動の充実を図る。
- ③各教科・科目で地域の題材やデータを扱うなど教科横断的な学習を実施し、日常的な学びと地域・社会との連動を図る。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
西村 訓弘	三重大学副学長（社会連携担当） 三重大学地域イノベーション学研究科教授	学識経験者
浦崎 太郎	大正大学地域創生学部教授	学識経験者
吉仲 繁樹	三重県商工会連合会専務理事	産業界
橋本 純	三重県漁業士 三重県海水養魚協議会長	産業界
西出 覚	三重県大台町産業課主幹	行政機関
岸川 政之	（一財）未来の大人応援プロジェクト 代表	コーディネーター
土方 清裕	三重県立飯南高等学校長	校長代表
安田 恵理	三重県立鳥羽高等学校教諭	教員代表

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
三重県立飯南高等学校	土方 清裕（校長）
松阪市企画振興部	野呂 隆生（地域振興担当理事）
松阪市飯南地域振興局	榎原 典子（局長）
松阪市飯高地域振興局	高木 達彦（局長）
松阪市教育委員会	中田 雅喜（教育長）
松阪市西部教育事務所	中林 穰太（所長）
松阪市立飯南中学校	中村 元亮（校長）
松阪市立飯南高等学校	森井 義和（校長）
松阪市粥見住民協議会	中野 孝是（会長代理）
松阪市宮前まちづくり協議会	向坂 文一（事務局長）
株式会社三ツ知製作所	堀出 一（業務部部長兼生産管理課課長）
有限会社深緑茶房	松本 浩（茶長）
叶林業合名会社	堀内 楓子
有限会社上野屋	佐々木 幸太郎（代表取締役）
NPO法人 i sierra（アイシエラ）	太田 覚（理事長）
三重大学地域イノベーション学研究科	西村 訓弘（副学長・教授）
三重県立飯南高等学校・同窓会	高橋 克良（会長）
三重県立飯南高等学校・PTA	中村 誠（会長）

三重県教育委員会事務局教育政策課	上村 和弘 (課長)
三重県教育委員会事務局教育政策課	津村 尚美 (主幹)

8 カリキュラム開発専門家, 海外交流アドバイザー, 地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	江森 真矢子	一般社団法人まなびと代表理事	都度謝礼にて対応
カリキュラム開発専門家	浅野 吉英	まちげい KNOT 代表 豊岡短期大学非常勤講師	都度謝礼にて対応
海外交流アドバイザー	該当者なし		
地域協働学習支援員	横山 陽子	松阪市地域おこし協力隊	松阪市が契約
地域協働学習支援員	高杉 亮	松阪市地域おこし協力隊 Takasugi atelier 代表	松阪市が契約

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
学校長の懇談等、事業の進捗管理	13日 適宜	適宜	6日 22日 適宜	適宜	適宜	23日 28日 適宜	26日 30日 適宜	8日 25日 適宜	14日 適宜	10日 12日 適宜	18日 適宜	
管理機関の実施等による取組	運営指導委員会での発表		16日 25日	1日 2日 23日	13日	地域みらい留学		14日 26日	運営指導委員会			19日
コンソーシアム 飯南高校活性化協議会	地域みらい留学		第1回	SBP交流フェア		運営指導委員会		第2回	第3回			

(2) 実績の説明

ア) 管理機関における事業の管理方法

- ・教育政策課の担当者と学校長の懇談を月平均1回以上行い、取組状況を共有するとともに、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた相談を行った。
- ・教育政策課の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップ等、各学期に複数回の学習参観を行い、成果や改善点等を学校長や研究主任等にフィードバックした。
- ・飯南高校活性化協議会を各学期に1回開催し、取組状況の報告を踏まえた協議を行った。

イ) 管理機関における主体的な取組について

- ・地域・教育魅力化プラットフォームが主催する地域みらい留学に参画するため、オンラインで行われた「地域みらい留学フェスタ 2020」の支援を行った。数回にわたるオンラインでの学校紹介では、「いいなんゼミ」の取組、美術部の「緑茶ラテアート」、應援団 Circle の活動など、生徒たちが地域を学び場とした探究活動を生き生きと紹介していた。また、参画費については、経済的な支援も行った。
- ・地域課題解決型キャリア教育の取組を推進している高校の生徒を対象に、一般社団法人未来の大人応援プロジェクト「未来の大人応援プロジェクト実行委員会」主催のSBP交流フェアに活動の場として支援した。飯南高等学校は應援団 Circle が地元企業とコラボした「木の手帳」の商品開発について発表し、全国上位6位以内である藻谷浩介賞を受賞した。
- ・地域人材育成コンソーシアム・いいなん第2回運営委員会において、委員同士が互いの職

場を訪問し、地域の仕事をリアルに知ろうと提案された。生徒の探究だけでなく、大人が探究をしようという気運が生まれている。

- ・高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況は、令和2年7月2日に高田短期大学との「高大教育交流協定」を締結した。この枠組みを使い、「いいなんゼミ」で保育士を希望している生徒の指導に講師を複数回にわたって派遣していただいた。
- ・事業終了後の自走を見据えた取組については、産官学が協働し、地域を学びの場とした活動を推進していくために、令和3年度より飯南高校をコミュニティ・スクールにし、学校運営協議会を導入することとなった。これで、飯南・飯高地域において、小・中・高がコミュニティ・スクールで緩やかにつながることになった。また、松阪市総合計画、第3章基本計画の中山間地域の振興における主な取組内容として「地域と協力して県立飯南高等学校の魅力化に取り組み、地域を担う人材の育成を支援します。」と記述された。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「産業社会と人間」における地域探究学習	1回	2回	3回	4回		1回	3回	3回	1回	3回	3回	
「キャリアデザイン」における地元や地域を知る活動およびプレいいなんゼミ	1回		2回	3回	3回	3回	1回	1回	1回	3回	3回	1回
「いいなんゼミ」における地域課題解決にむけた探究活動	4～12月の毎週火曜日1時限分、金曜日2時限分で、それぞれのゼミに分かれて探究活動を行った（臨時休業期間前に事前指導を行い、臨時休業期間は生徒個人の自宅活動を主とした）。7月に中間報告、12月に最終報告を行った。最終報告で内容が評価されて学年代表となった生徒8名は、2月10日の「いいなんゼミ発表会」に向けて活動内容を精査し、発表会当日は飯南産業文化センターにおいて成果発表を行った。											
学校設定科目「社会科学入門」での地域課題学習	2回	2回	5回	2回		3回	3回	2回	2回	3回	3回	
授業改善のための教員研修			1回							1回		

※4、5月は臨時休業期間のため、当初予定回数をみえ消しとした

(2) 実績の説明

ア) 研究開発の内容や地域課題研究の内容

本研究では、①総合学科の柱に位置付けている3科目の再構築、②4系列の特色を活かした地域貢献のための学習活動の充実、③探究的な学びを進める授業改善、の3つを柱として取り組んだ。

①における「産業社会と人間」（1年次総合学科必修科目）は、昨年度初実施のフィールドワークの反省点を踏まえて深化させた。1学期は自分の足で歩き、自分の目を見て地域の魅力を発見し、2学期は1学期と同じ地域の魅力を深く掘り下げた。地域の方への聴き取りは、生徒自らで約束を取る方法を取り、生徒の主体的選択で活動を進める仕掛けとした。3学期は「かけ算プロジェクト」と銘打ち、これまでの活動で興味を持ったものと他地域・他分野とを比較した活動を進めた。

「キャリアデザイン」（2年次学校設定科目）では、新型コロナウイルス感染症の影響で

企業見学や修学旅行等が中止・延期となり、従来の計画を大きく変更した。その中で、キャリアインターンシップは地元企業や地域の温かい協力により、夏季休業中に35.4%の生徒が飯南・飯高地域で体験を行うことができた。そして、昨年度から引き続いて商工会議所と連携して「高校生と地元企業との交流会」、さらに「本気の大人講演会」を3度開催し、地元企業の仕事内容ややりがい等についてさらに知る機会とした。

「いいなんゼミ」（3年次総合的な学習の時間）においては、4、5月の臨時休業期間に入る前に学年間で意識付けを行い、オンラインで教員と相談できる環境をわずかではあるが整えた。また、外部の大人を伴走者として繋げ、専門的な学びを受けてさらに探究活動を進めるに至った。

②については、コロナ禍によって当初計画していたイベントや福祉施設実習等を自粛せざるを得ない状態が続いた。その中で、昨年度フィールドワークにおいて福祉施設での体験を行った生徒が在籍する介護福祉系列では、地域包括支援センターと連携して松阪市の介護福祉の現状を学んで課題点をまとめたり、認知症サポーター研修を受けたりなど、将来を見据えた学びを実施した。そして総合進学系列では、高大連携授業で地域を軸にした専門分野を学び、生徒自身の興味と地域とをかけ算する取組を進めた。また、昨年度に学校キャラクターづくりを行った生徒たちは、松阪保護司会から会報の表紙絵の依頼を受け、地域から生徒の力を求められる場面も出てきた。

③については、6月に宮崎県立飯野高等学校の梅北瑞輝教諭とオンラインで繋ぎ、生徒の自走した探究活動や、その結果生徒や校内の起こりうる変化について学び、1月には高知県立宿毛高等学校の小島大和教諭とオンラインで繋いで、日常的な授業での学び合いのスキルや振り返りの言語化についての研修を行った。

イ) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、「いいなんゼミ」は、総合学科の柱に位置付けている3科目であり、この連動を強化することで3年間を通じた地域課題解決型のキャリア教育の充実を想定した。令和2年度は「産業社会と人間」の深化、「キャリアデザイン」では地域の仕事や暮らしを知るため、キャリアインターンシップでの地元企業への体験活動や本気の大人講演会を実施した。

ウ) 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組

昨年度「産業社会と人間」でのフィールドワークの学びを連続性のあるものとして活かし、各系列での学習活動の充実につなげた。1年次から地域を学び場としたことで、生徒は地域を自分ごととして捉えられるようになった。そのため、介護福祉系列や総合進学系列において地域を軸にした授業での学びを実施した際、昨年度の学びの土壌を踏まえて意見したり考察したりすることができた。

エ) 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

昨年度から地域協働カリキュラム推進委員会を設置し、本校教員、カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の計12名で全体企画や指導内容を検討している。今年度は3度の委員会を開催し、昨年度の「産業社会と人間」におけるフィールドワーク内容の改善提案や、対面とオンラインのハイブリッド初開催となる「いいなんゼミ発表会」等について協議を行った。細部の内容については昨年同様に、委員会の下部組織として作業部会を設置して継続協議を行い、カリキュラム開発等専門家および地域協働学習実施支援員も参加した。

また、外部の折衝については委員会メンバーが中心となって行い、昨年度より役割を分担して取り組んだ。

オ) 学校全体の研究開発体制

昨年度より該当学年を中心に素案を作り、それを作業部会で精査する流れを作っている。例えば地元企業へのキャリアインターンシップや、対面とオンラインでのハイブリッド初開催となった「いいなんゼミ」は、学年の意向をもとに作業部会で意見を出して構築し、企業との連携は進路指導部を中心に対応した。また、地域協働カリキュラム推進委員会での協議内容は職員会議で報告し、校内教員との情報共有をはかった。系列での学習活動については、系列に関係する教員で実施内容を考え、地域との関係性を構築した。また、授業改善に関する研究会は昨年度同様に本事業研究担当教員が受け持ち、管理職と共同して人選・連絡を行った。

カ) カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け

カリキュラム開発等専門家は、助言者として地域人材育成コンソーシアム・いいなんおよび地域協働カリキュラム推進委員会に参加し、他地域の事例やこれまでの実践事例を通してアドバイスをもらっている。今年度はコロナ禍もあり県をまたいだ移動が行いづらかったため、月1回程度のオンライン会議での協議や助言を行った。

地域協働学習実施支援員は、松阪市が雇用した松阪市地域おこし協力隊が担っており、週1回程度打合せを行っている。フィールドワークや地域を軸にした学びにおいて、生徒とともに活動し、地域の大人とのパイプラインとなっている。

キ) 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組み

地域協働カリキュラム推進委員会や作業部会において生徒の活動の様子や振り返りを共有し、反省点を協議して次年度への改善検討を行っている。さらにコンソーシアム会議や活性化協議会、学校関係者評価委員会でも情報共有をし、地域の関係者にも助言・評価をいただいている。また、学期ごとにアンケートを実施してその数値を集約・共有している。

ク) カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組

昨年度同様に、フィールドワークにおける地域の施設や本気の大人講演会の講師紹介、生徒輸送バスの運行、フィールドワークの受け入れ、ふるさと看板プロジェクトへの協働等を行った。さらに今年度は、「キャリアデザイン」における地元企業へのキャリアインターンシップに積極的な受け入れ場所の提供、「いいなんゼミ」において生徒の伴走者として指導・助言も行った。

ケ) 運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援

運営指導委員会の活動日程・活動内容は以下の通りである。

活動日程	活動内容
令和2年7月16日 (第1回)	・飯南高校の取組発表及び意見交換 ・コロナ禍の中での地域課題解決型キャリア教育について
令和2年11月26日 (第2回)	・志摩高校「志摩学」授業参観及び研究協議 ・地域課題解決型キャリア教育モデルの構築に向けて
令和3年3月19日 (第3回)	・1年間の取組を共有し、成果や課題、次年度に向けた方向性について協議

コ) 類型毎の趣旨に応じた取組

昨年度「産業社会と人間」でフィールドワークを実施し、地域に学び場を設けたため、地

域を軸にした学びを実施すると、例年以上に「地域の自分ごと化」が土壌として出来ていることを感じられた。地域で起こっていることを具体的にイメージすることができ、データ活用の際にはさらに理解が深まった。また、地域の大人に生徒の伴走者となってもらうことでその学びが高まり、生徒の成長も促進された。

サ) 成果の普及方法・実績

キャリアインターンシップ発表会（9月）と第2回フィールドワーク発表会（11月）を実施し、当日関わっていただいた地元企業や地域の方等のべ20名ほどの参加を得て、活動内容の還流報告を行った。その活動やいいなんゼミでの探究活動、部活動・サークル活動など学校に関する報道については、数社の新聞や行政チャンネル「アイウェブまつさか」など、各メディアによって80回程度取り上げられた。活動の成果の一つは、應援団 Circle が行った地元企業との「木の手帳」制作（「いいなんゼミ」において生徒が学びを継続）であり、第5回全国高校生 SBP 交流フェアにおいて全国上位6位以内に入り、藻谷浩介賞を受賞した。2月には「いいなんゼミ発表会」をオンラインでも視聴できるようにし、初の対面とオンラインのハイブリッド開催を実施した。オンラインではコンソーシアムの関係者や地域住民以外にも、県内外高校や連携中学校、近隣小中学校にも視聴できるように案内を送付した。

また、本事業の取組を外部に発信する機会として、校長が地域を学ぶ取組を始めた市内の嬉野中学校や殿町中学校で基調講演を、本事業研究担当教員が全国サミットでの分科会報告、ユマニテク教育研究所オープニングフォーラムでの実践報告を行った。この活動を通して、本事業の取組で得た学びや実践内容、生徒が成長した姿を他地域へも波及することができた。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

「産業社会と人間」について、昨年度は2度のフィールドワークを別々の地域で行い、活動内容は教員側がある程度設定していたが、今年度は同じ地域で行い、地域の方への連絡も生徒に行わせた。心配する声もあったが、地域振興局長とともに散策をし、屋号が掛けてあるという魅力を地域住民と対話しながら探ってくるなど、昨年度には想定できないより主体的な学びの形がみられた。同じ地域に行くことで、成果物である魅力マップでのアンケートコメントを踏まえた活動も行うことができた。地元出身生徒からは「きっと知っていることばかりだろうと思っていたが、発見もあり普段では体験できないことができた」という声があり、体験活動を通して地域を深め、そこでの偶然の出会いも楽しみながら、追究力や対話力を高めることができた。この取組の中で、地域住民が作成した「薫のモニュメント」を文化祭にお借りできるという副産物もあり、生徒の活動を通して地域との信頼関係も一層強固となった。

今年度のキャリア開発の重点である「キャリアデザイン」については、校外へ飛び出す活動が目玉であったが、コロナ禍のためキャリアインターンシップは開催が難しいとの声が校内では強くあった。しかしコンソーシアムの会議において、地元企業から「今までの信頼関係がある」「水くさいことは言うな、動いてほしい」「実際に大人との出会いが大切」など温かい声をいただき、飯南・飯高地域で28名もの生徒を受け入れてもらった。生徒発表会では「この地域には地元との関わりが強い企業があり、ここからでも世界に発信することができる」「地域しかない地域ならではのことが出来ていた」という意見があり、地域の活力を感じとれたようだった。さらには感想だけにとどまらず、企業に対して商品開発の提案をする生徒も出た。また、本気の大人講演会では「移住される前後で気持ちはどのように変わったのか」「新しいことを始めるときにどんな考え方をしたらいいか」といった質問が出た。昨年度における地域での学びが少しずつ線となり繋がっている印象が生徒の中からも垣間見え、地域のことを自分ご

ととして感じながら、自分らしく生きるための価値観と照らし合わせる事が出来、学びの延長上に自身の将来を見据えていることも実感できた。

昨年度地域を学び場にした2年生は、フィールドワークでの体験から系列選択をした生徒もおり、4系列での学習活動は昨年度から軸が通った学びとなった。総合進学系列の「社会科学入門」では、行政学・教育学・経済学の視点で地域を見つめ、生徒からは「一つの視点ではなく多角的に見ることで違った学びになる」と意見が出た。また「国際社会と日本」では、地域の特産物を英語で紹介する活動を通して、「英語で伝えるためには、さらなる地域の理解が必要だ」と感じて、改めて地域を見つめ直しながら追究する姿がみられた。コロナ禍で実習先に行けなかった介護福祉系列では、地域包括支援センターと連携した学びを進めるとともに、実習施設から要請を受けて、コロナ禍で販売が低迷しているお菓子工房の販売協力を行うことで、障害者支援という実体験を積むことができた。昨年度イメージキャラクターの制作を通して地域の特産品や文化・伝統等を考察したコンピュータ系列は、地域へ発信する姿を保護司会から認められて会報の表紙絵を作成するに至り、地域から生徒の力を求められる場面も出てきた。このように、昨年度からの生徒の学びが地域にも連動して新たな動きが起き、より生徒の学びが多様になり、自然と教科横断的な学びとなって生徒が成長していった。

3年間の集大成である「いいなんゼミ」では、4、5月の臨時休業期間もあって活動しきれなかった生徒が一定数存在した。ただその中でも、地元企業とコラボした商品開発に磨きをかける生徒や、地域を活性化しようと休業期間中から活動し、クラウドファンディングで学校文化祭に打ち上げ花火を企画して地域に笑顔を届けた生徒など、コロナ禍でも自走する姿もみられた。また、個人研究において、活動初期段階からその生徒に伴走者が見つかることで、生徒の成長が急加速することが教員間で徐々に共有されることにもなった。

授業改善については、オンライン研修を行い、課題解決に取り組んでいる他県の教員から探究活動や日々の授業実践を学んだ。探究活動で高校生が自走した結果を具体例で示してもらい、同じような活動をしている教員が自信をもって生徒と伴走することで全国高校生SBP交流フェアでの全国6位以内への実績へと繋がった。探究活動で全国受賞をした成果は大きく、地域の誉れとなり、「高校生が地域を動かすことができる」と評価をいただいた。また、学び合いのスキルや振り返りの言語化の研修を受けて、日常の授業で振り返りシートを実践する教員の姿もみられた。

その中で、本事業の成果目標である「対話力・追究力・創造力・発信力の4つの能力がすべて身に付いたと考える生徒の割合」は、2年生において41.7%（7月）→46.8%（12月）→92.9%（3月）と飛躍的に上昇した。各項目別で見ても、対話力76.4%（7月）→80.8%（12月）→97.1%（3月）、追究力80.6%（7月）→76.6%（12月）→95.1%（3月）、創造力75.0%（7月）→71.8%（12月）→94.3%（3月）、発信力58.3%（7月）→76.6%（12月）→97.1%（3月）となり、着実に生徒の力の向上に繋がっていると考えられる。また今年度の1年生の「4つの能力がすべて身に付いたと考える生徒の割合」については、昨年度1年生が学年末に49.3%であったのに対して90.6%であった。3学期には、2年生は「うれしいなんゼミ」、1年生は「かけ算プロジェクト」と探究的な学びを行っているが、2月に行われた「いいなんゼミポスターセッション・展示発表」および「いいなんゼミ発表会」で3年生の学びの集大成を見て、学年を越えて学びの意識が高まり、自身の活動と有機的に結びついた結果、このような生徒自身の数値的な成長実感へと繋がったのではないだろうか。

一方、「松阪市及びその周辺地域出身の就職希望者のうち、松阪市内及びその周辺地域の事業所等に就職した割合」は75.8%（令和元年度）、72.2%（令和2年度）、また「松阪市及び

その周辺地域出身の就職希望者のうち、飯南・飯高地域の事業所等に就職した生徒の人数」については、7名（令和元年度）、3名（令和2年度）となり、今年度はいずれも数値が下がった。昨年度の2年次における「地元企業との交流会」においては地元企業に好印象を持っていた生徒が多い学年であったが、地元企業への就職とはあまり結びつくことはなかった。コロナ禍により例年求人のある企業が採用を取りやめたところもあったが、「インターンシップや説明会をどのようにすると就職へ繋がるのか考えていきたい」とコンソーシアムの企業から意見もあり、インターンシップ受け入れ先との事前事後の情報交換を積極的に行う必要があると感じられた。

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

「産業社会と人間」は事業後3年目となり、活動内容の確立に向けてより校内で作業分担を行い、地域とも連携して取り組んでいきたい。「キャリアデザイン」は、今年度は企業見学や修学旅行が実施できなかったが、次年度はこれらの経験も含め自己の在り方・生き方を見つめ、他地域と自地域との比較も行いながら、対話力・追究力・創造力・発信力を高めていきたい。地元企業へのキャリアインターンシップでは、企業側から「生徒から企業に対して本音のフィードバックをしてほしい」「どのような体験を他では実施しているのか」等の意見をいただいたため、早い時期から環境整備や準備を行い、さらに連携して生徒のより良い学びの土壌を構築していきたい。また1月から行う「うれしいなんゼミ」の段階から校外の大人を伴走者として生徒に繋ぎ、3年間の集大成「いいなんゼミ」での探究活動への流れを作る必要もある。今年度は臨時休業期間があったとはいえ、提案でとどまった活動もあったため、より早期に探究活動に連動させ、伴走者と協働しながら考えたことを実行に移す体験を通して生徒の能力を高めていきたい。

今年度は「産業社会と人間」における地域での学びが系列科目のモチベーションに繋がり、地域を軸として学ぶことに意味が見いだせたことから、この経験を活かしさらに他科目でも連動した学びへと昇華させ、その上で地域と連携しながら新たな価値創造ができるかを課題としたい。また、各教員で高め続けている授業力については、新たな授業改善である考えるための技法についても校内で意識を共有し合いながら、探究活動のためのスキルの習得・活用を進めていきたい。

【担当者】

担当課	教育政策課	TEL	059-224-2951
氏名	津村 尚美	FAX	059-224-2319
職名	主幹	e-mail	kyosei@pref.mie.lg.jp